ミスルギ皇女が
家畜の家畜になるまで
「この私が、ノーマ以下の家畜奴隷に
堕とされるなんて・・・」

私の名はアンジュリーゼ・斑鳩・ミスルギ。
ミスルギ皇国の第一皇女…だったのに
突然自分はノーマだと言われこんな
監獄に連れて来られて酷い仕打ちを受けたわ。
理不尽よ！私は皇女！こんなゴミ溜めの
ような場所にはいつまでも入られない！
幸い私は天才だからヴィルキスとかいう
伝説の機体も乗りこなせるし、隙を
見てこんなところ脱出してやるんだから！

しかし、世間知らずな彼女は気づかなかった。

自分の横柄で差別的な態度がいかに周囲に悪印象を与えているかということ。

自分に高い才能があればあるほど、それを利用しようとする者にとってアンジュの性格は不都合しかないこと。

そして監獄に入れられた皇族を無事で済ませようなんて甘い考えの革命家がいるはずがないということに・・・。

～[食堂]～

「おいアンジュ手前ぇ！今なんて言った！」
「こんな生ゴミみたいな食事、まともな人間なら絶対に食べられないって言ったのよ。皇女の私ならなおさらね。ああでも、ノーマは人間じゃないものね。犬の餌みたいな食事がお似合いよ」

そう言うとアンジュは女囚の一人の皿を床にひっくり返して笑った。

「ほら。家畜にも食べやすいようにしてあげたわよ！人間様の番犬らしく床に手を付いて食べれば？フン！」

アンジュはそのまま踵を返して自室に戻ろうとした。しかし・・・

「もう我慢なら無ぇ！」「今日という今日は頭に来たぜ！」
「みんな！こいつを抑えろ！」
日ごろからアンジュの態度に溜まりに溜まった他の隊員の不満は、今回の件を機にとうとう爆発した。

「な・・・何よあんた達！なにをするつもり？離せ！やめろ！」

「よし、出来たぜ。」「ウーッ!ウウーッ!」
「ぎゃっはっはっは!良い格好だぜ!
ミスルギ皇国の皇女とやらが食堂の
真ん中で自分のパンティロに突っ込まれて
マンコとおっぱい丸出しにしてやがる!」
「下手に動くと紐で繋いだクリトリスと
乳首がちぎれるぜ!」
「ウウーッ!(よくも…!こんな…!
皇女である私にこんな仕打ちを!)」
「こいつはまだ完成じゃないぜ…ホレ!」

ブスウ！
「！？ウウ！！」
「ギャッハッハ！尻の穴に！花刺してやがる！」
「こんなところの食事は不味くて食えないって
いうなら昼飯時は暇だろ？
皆の為に食堂を賑やかす花瓶にでもなって
くれや！」
「ウォーッ！《そんな…私の高貴な身体が…
ちくしょう！やめろぉ！》」

「よし、初めて見た奴がビックリしないように油性ペンで書いといてやる。尻に」
「ウウウ…(くそ！ここを出たら絶対にここにいる奴らを皆殺しにしてやるわ！皇女の権限があればこんな…)」
「あれ？この花、毒持ってる奴じゃない？」
「！？(嘘でしょ！)」
「え？マジか。まあいいだろこんな奴がどうなったって」
「ンィーッ！ムウーッ！(やだ！抜きなさいよ！抜いてよ！)」
「うわ！暴れると落っこちて怪我すんぜ」
「！？ウウーッ！」「え？」

「フグゥウウクッ！」ブボボッ！モワッ！
「うわっ！臭っせぇ！」「こいつ屁を垂れやがった！」
「ウーッ…！（抜け…て…）」

ブリブリブリ…
「ウウ…(やった…抜…け…)」
「キャアーッ!」
「うわぁ!こいつ皇女のくせに人前でウンコ漏らしやがった!」「臭っ!オエッ!」
「最低!何が皇女よこのウンコ女!」
「(あ…?そうか…今私…人前で…)」
「このやろう!やっちまえ!」

こうして食堂で脱糞するという
大恥をかいたアンジュは、
他隊員の制裁を受けた上で
どこかへ連れて行かれた。

～[朝食後・食堂裏のゴミ置き場]～

ドサッ！

「へっ！お前さっきノーマを人間扱いして
なかったが、今のお前の姿は人間どころか
動物以下の生ゴミだぜ」
「どうでちゅか～？おいちいでちゅか
アンジュちゃん。皇族様の高貴なウンコはｗｗｗ」
『ク…グゥ…』
「失神しかけてるな。もう行こうぜ」
「おいおい皆ちょっと待てよ。
いくらなんでもこんな臭いまま放置して
おくなんて可哀そうだろ？ほらよっ！」

ズブウー！「ゴボォッ！」
「トイレの消臭剤だ。てめえの一番臭いところにくれてやるよ！」
「臭いものには蓋ってか？ぎゃはははっ！」

チョロ・・・ジョロロロロロ～！
「うわ！今度はションベンかよ！
しまりの無い女だな～」
「汚えんだよこの汚物女！」
「オッ・・・オウウウウ～ッ！」
「プッ！こいつ泣いてやがるぜ！
まるで赤ん坊だ」
「マンコ丸出しでウンコと
ションベン漏らしたのがよっぽど
ショックだったようだな」

「ところでさ、なんで皆こいつのマンコには
手を出さないの？」
「それがさ、どうやらこいつ処女みたいなんだよ」
「ふーん。で？」
「せっかくの皇女様マンコだ。もっと派手で
無様な処女開通式をさせてやりたいだろ？」
「なるほどな・・・ひひひ」

その後、アンジュは別の隊員に助けられ、
なんとかその日の出撃には参加した。

「（ちくしょう・・・ノーマの分際でよくも
ミスルギ皇国の第一皇女である私に
こんなことを・・・！あいつら・・・絶対殺
してやる・・・！）」

しかしそう考えていたのも束の間、
アンジュが一人着替えている更衣室にドアの隙間から
催涙ガスが流し込まれ、アンジュはその場に倒れ伏し、再び
さっきアンジュをいたぶった女囚達の手に堕ちたのだった。

「う…う～ん…ハッ！
こ…こ…はどこ？
私は…なんで裸なの…？」
「ハッハッハ」
「何よこの犬…」
「目を覚ましたようだな。
こいつはバルカン。ジャスミンが
飼ってる犬だ。これから
お前の夫になる犬だからな。
礼儀正しくしろよ」
「はあっ？何馬鹿なこと
言ってるのよ！早く腕の縄を
ほどけ！ほどきなさいよ！」
「へっ。いつまでその強気が
続くか試してやるぜ。
ほれバルカン！
昼の散歩の時間だ！」

「ワンワン！」
ダッ！ビィイン！
「！？いぎゃあっ！いっ痛いいっ！
何これっ！わだじのおっ！
アゾゴがあっ！」
「アソコじゃねえ！
ク・リ・ト・リ・スってんだよ！
オラオラ早く立ち上がって
走り出さねえと
クリトリスが引き
ちぎられるぞぉ！」

～『アルゼナム・廊下』～
「びいいいいいいっ！ふぎょおおおおっ！」
「うわっ！何あれ！」「キモ～い」
「どうしたアンジュ！バルカンの散歩か？」
「ばーか。ありゃ犬に散歩してもらってるんだよ！ギャハハハ！」
「ちぎれるっ！クリトリスがちぎれちゃうううっ！」

「ハーッ…ハーッ…」
「おいおいもう疲れてダウンか～？情け無いなぁ～」
「ちくしょう…殺す…殺してやる…お前ら…絶対…」
「そうかいそうかい怖い怖い。じゃあ仕返しなんてされないようにもっと徹底的にやっておかないとな。バルカン」

「ワン！」
ガバアッ！
「…え？何よこの犬…
いきなり私に跨ってきて…」
「ジャスミンは去勢手術とか
嫌いでな。たまに本土から
雌犬連れてきて解消したり
するんだが、これからは
手間も省けて良いぜ」

ピト…
「ちょ…ちょっと…
何汚いものを私に
押し付けてるのよ…
私は人間よ？アンタ
みたいなけだものとは
違うの…ちょっと！
あんた達も見てないで
こいつどかしなさいよ！
悪ふざけにも度がある
でしょ！」
「言っただろ？お前には
こいつと夫婦になって
もらうって」
「えっちょっと馬鹿なことやめっ！」

ズブッ！
「ぐひっ！」

「痛っ！いだぁっ！
痛い痛い痛い無理っ！
死ぬゥ！」
「ぎゃははは っ！
良かったなぁ皇女様！
犬にヴァージン
奪われるなんて
平民にはとても
真似でいない
開通式だぜ！」
「いやぁっ！やめろっ！
ふざけんなバカヤロウ！」
「オラ！暴れないように
取り押さえろ！」
「はなせっはなせっ！
あああああーっ！」

ブチブチブチブチッ！
「あ――――っ！」

『あ…ああぁ…？』
ゲシッ！
「くはは！犬チンポの具合はどうでございますかぁ？皇女様ぁ～」
「（あれ…嘘…これ…現実…？）」
「ワン！」
「ひッ！」

「あ…嘘…本当に私の
大切なところに…
犬のが…あ…あ…」

「うわぁ～っ！そんなぁ！
私・・・私の初めてがぁ～っ！」
「はっはっは！そうさ！
その顔が見たかったのよ！」

「ハッハッハッハ！」
ジュルルルルッ！
「いがあっ！やべでぇ！
もう動かないでぇ！」
「おいおい夫婦の営みは
始まったばかりだろ？
バルカンももっと
相手して欲しいってさ」

「あがっ！ぎがっ！ぎゃぁ！」
ジュボッ！ジュボッ！ジュボッ！
「バルカンもよっぽど溜まってる
みたいだな。すげぇピストンだ」
「い、いだいぃ～！いやぁ～！
もういやぉぉ～！なんで私が
こんな目にぃ～！何も悪い
ことなんてして無いのにぃ～！
助けでぇ～！お母さまぁ～っ！」
「はん。散々人を見下して
差別しといてよく言うぜ」
「お、バルカンもそろそろ
フィニッシュだ」

ゴプッ！ドブゥ！
『あじゅっ！あじゅあぁぁっ！』
「はいおしまーい。おーおー
たっぷり出されちゃって」
『あ…あ…』
「この調子なら孕んじゃってる
かもな。なにせ道端でウンコ
漏らす動物女だしな」

ゲシッ！
「おーい聞いてるー？」
ピクッ…！ピクッ…！
「あー完全に
失神してるなー
…お？」

チョロロ・・・
「あれ？こいつまたションベン
漏らしてない？」
「どこでもションベンするな
このバカは・・・バルカン
可哀そう」
「犬のチンコって睾丸ごと
ブチ込むからもう
二、三十分は抜けないぞ
これ」「ほっとけほっとけ」

その夜、心に深い傷を受けたアンジュは
復讐する気力も体力も残されてはおらず、
制服を着て部屋に戻りすぐ眠りに付いた。
しかし、何故かアンジュの部屋の鍵は
開けられ、またもやアンジュは捕まって
しまうのだった。
～『アルゼナム・運動場』～
「またこんなくだらないことをして・・・
あんた達は犬畜生にも劣るクズよ！」

ドゴオッ！
「ふぐっ！」
「昨日その犬畜生に犯されて
ママァ～ママァ～って泣いてた
奴が何言ってんだバーカ」

「こんな！こんなことで私は絶対屈したりしない！私はミスルギ皇国第一皇女、アンジュリーゼ・斑鳩・ミスルギなのだから！こんなことをしても無駄よ！離しなさい！」
「なんか随分と元気だな」
「ビビッてんだろ。これから何されるか考えて」

チョキチョキ…
「はい全裸ご開帳～」
「改めて見ると本当に間抜けな姿だな」
「くっ…」
「お次は…と」
キュッキュッ

「はいターゲット完成～」
「真ん中は百点。外の白部分が50点と30点な」
「(この程度なら…昨日に比べれば…！)」
「そんで最後にこれだ」

ズボッ！
「ぐうっ！」
「特性極太浣腸プラグ～♪」
「これで時間が経つほどに的は
大きくなっていく。なるべく
早く爆裂させた奴ほど高い
ボーナスポイントがもらえる
って訳だ」

「こ…こんなもの…全然大したこと
無いわ！あんたらがいい気になって
いられるのも今のうちよ！」

「はいゲーム開始～」
ドゴオ！
「おぐぅ！」

「ハーッ！ハーッ！どうせすぐに
ミスルギ皇国から助けが来るわ！
そうしたらあんたらなんか
皆殺しよ！でも今私を解放
するのならそいつだけは許して
あげる・・・」

バコォ！
「ふべらっ！」
「ああごめん。話長いから聞いてなかった」

「次行くぞー！次ー」
「口閉じてないとした噛むわよ。
別にアタシらは良いけど」
「うう…うう…」

…数時間後
「ふぐぅー…！ふぐぅー…！」
「よく耐えるねぇ。さすが皇女様。根性あるぅ」
「よーしあたしがとどめさしてやる！くらえっ！」

ドゴオ！
「うぐうううう！」

「(も…もう限界…頭が…破裂する…
何度意識が飛んでも無理矢理起こされる…
お尻も…もう我慢できない…
このままじゃ…死…本当に…殺され…)」
「よぉ～っし次は決めてやるぜ」
「ひっ！まっ待って！」
「あ？」

「降参するわ！私の負け！！
私が全部悪かったわ！
もう失礼なこと言わない！
貴方達の言うこと何でも
聞いてあげるから！もう許して！」

ドゴオ！
「うぅぅ～～～～～～～～～！！！！！」
「それが謝る態度かよ！」
「『あげる』ってなんだいつまで上から
目線なんだよこのウンコ女！」
「敬語使えボケェ！」

「あぎゃあああああ！やだあ！
出る！出ちゃうううううっ！」
「何でも言うこと聞くって言ったな？
じゃあ今ここで糞漏らせや」

キュポンッ！
「あっ♥」

ブビュボボボチョッ！
「おぎゃあああああぁぁーっ！」
「ハハハハッ！ミスルギ皇国名物
下痢便噴水ってか？」「
こりゃ最高の見世物だな！
もっと人呼んでこようぜ」

……数十分後
「よし、準備できたな」
「お前が本当に改心したってんなら、
さっき言われたとおりに出来るはずだ」
「ハ、ハイ！チャンスをいただき
ありがとうございます！許して
いただけるようにがんばります！」

「おっと看板を忘れてたぜ。ほらよ」

ズブブゥッ!

「ほぐぅ!」

「オラお礼はどうした!ナニカしてもらったらお礼だろうが!」

「ハイ…!ありがとうございます…!」

「いらっしゃいませ！私は元ミスルギ皇国皇女にして現アルゼナム専属公衆ストレス解消サンドバック、アンジュでございます！」

「今までの非礼のお詫びとして一回百円で皆様のストレス発散にご奉仕させていただきます！」

「へー。面白そうじゃん、お前のデカい態度にはいつもイラ付いてたんだよ！」

ドカッ！
「うげえええええっ！」
クソ姫的当て
ストレス解消！
1回 100円

「あ…ありがとうございます！ありがとうございます！」

「プハッ！的当てにされて例を言うのかよ！なっさけなー！」

「いいぞーアンジュー！その調子だ！」

ドゴオッ！
「うびえええええええええっ！」
「おい看板は何点だ？」
「えーとじゃあ…80？」「
ち…しけてんな…」「
オラアンジュ！お礼忘れたら
ノルマ追加だぞ！」

クソ姫的当て
ストレス解消!
1回 100円
「ありがとうございますっ!
ありがとうございますうっ!」
「ギャハハハッ!なんだあの
惨めな生き物!」

「ほげっ!」
ドボリョリョリョ!
「うおっ!漏らしやがった!」
「オラアンジュ!台詞!」

「ボーナス確定！ボーナス確定！
ウンコボーナス！ウンコボーナスゥ！
おめでとうございますぅ！」
ジョロロロロ…

「ひゃっはっは一緒にションベンも
漏らしながらお祝いしてやがる！
こりゃ最高のストレス発散だな！」

「はいお一人様終了ー。ノルマの
一万円まであと99人。今日は
非番だから終わるまでやらせるぞー」

「あ…い…ありがとう…
ございま…」

「皆様！今まで大変申し訳ございませんでした！
私、アンジュリーゼ・斑鳩・ミスルギは只今を持って人間、ノーマに与えられる全ての権利を放棄し、このアルゼナル共有の家畜奴隷アンジュとして！一生皆様にご奉仕することをここに誓います！」
「マジかよ…」「うわぁ…」
「よくできました。さて、謝罪と言えばまず断髪なんだが…お前は入所日に一度断髪は済ませてるからな。ちょっと趣向を変えるか」
「はいっ！よろしくお願いします！」

ジョリッ…ジョリッ…
「これでよし。どうだ？陰毛全部剃られた感想は」
「は…い…嬉しいです…」
「あぁ？声が小さくて聞こえねぇーぞ？あと嬉しいならもっと笑えや！またサンドバックに戻りたいのかなー？」
「ひいっ！ごめんなさい！ごめんなさい！」

「アンジュの汚らしい金髪陰毛を丸坊主にしていただいてありがとうございます！幼児以下の知能の私には生まれたまんまの赤ちゃんマンコがとても相応しいです！」
「よし、じゃあ次はここにいる皆に降伏宣言だ。もう皆に虐められたくないだろ？」
「はい…よろしくお願いします」

ブスッ！
「ぬひぃん！み…みなさ～ん。
私、元ミスルギ皇国第一皇女は
ここに、アルゼナル全隊員に対して
全面降伏を宣言しますぅ！」
「ホレ！ちゃんと尻振って
白旗はためかせないと
降伏が伝わんないぞ」
「は…はい！」

「フンッ！フンッ！」
「アハハ何あれ～」
「本当に尻で白旗振り始めたぞ！」

「降参しまぁ～す！私の負けでえ～す！
何でも言うこと聞くので、もう虐めないで
下さ～い！雌犬アンジュはノーマの皆様に、
完全敗北しましたぁ～！」

「ちなみに今の敗北宣言も
今までのこいつの処女喪失とかも、
全部艦内ネットにアップしてある！
また外部通信許可を得て世界中にも
配信中だ！」
「そこで得た利益は
動画作成者達に分配されることに
なってるから、お小遣いが欲しい奴は
こいつを好きに使って面白い
動画制作に挑戦してみてくれ！」
「え…？はは…そうなんだ…」

「じゃあ最後に記念撮影だ。
一足す一はー？」
「にいいいい～！」
パシャッ！
こうして、アンジュの人間としての
生活は終わりを告げたのだった。

～『数日後・早朝・アルゼナム廊下』～
ガランガラン！
「はーじーまりーのーひかりー♪きーらーりきーらり♪
おーわーりーのーひーかーりー♪るーらーらーるらー♪
皆さんあさですよー♪おきてくださーい♪」
「ハッハッハ！ワン！」
「ウッせぇなァ…
おいアンジュ！
いい加減その糞みたいな
歌やめろって言ってんだろ！
耳障りなんだよ！
鶏の鳴き真似でもしてろ！」

「はい！コケコッコー！コケコッコー！」
「ぎゃはははは！上手いぞ！」

「おうアンジュ！下の毛の代わりに
尻尾生やしてもらったのか！
良かったわね！」
「はい！皆様のご好意、
大変嬉しく思いますワン！」

「アオッ！アオッ！アオウォ～ン♥」
『ハッハッハッハ！』
「ほらアンジュ！もっと上手く
誘わないと旦那にチンポ恵んで
もらえねぇぞ！」
「あ―あ―来たときは処女だった
マンコも滅茶苦茶だな」

『ワン！』
「ああっバルカンさま！
おチンポ恵んで
いただけるのですか？
ありがとうございます！
ありがとうございます！」

「ワウッ！」
ジュボオッ！
「あぴいっ！」

「うきゃぁー♥犬チンポ
きたぁっ♥
獣ピストンしゅごいれしゅうっ♥
アンジュの家畜マンコと
相性抜群♥
ベストカップルゥ♥」
「最初はあんなに
嫌がってたのに、
今じゃ自分から犬に
チンポをおねだりする
なんてな」
「人間換われば変わる
もんだ。いや、今は
人間じゃなくて家畜か」

「ベッベッベ！」
「あっ♥ちゅう？
チュウれしゅか？
えへへぇ♥アンジュ
けだもの交尾しながら
チュウするの
らいしゅきい♥
ベロベロベチャア♥
ンッンンッ♥」

ドプッ！ドプププウッ！
「ウピィーーーッ♥
犬ザーメン来たぁーっ♥
私もイクぅーっ♥」

「んぺぇ…♥んぷぉぉ…♥」
「ハッハッハ」
「オラ！恋人チンポだ！念入りに綺麗にしろよ！」
「あい…ありがとうございましゅう…♥」

チョロロロロ…
「うわっ！犬のチンポ舐めながら嬉ションしてる！」
「ちゃんとトイレのしつけもしないとだめだなこりゃ」
「漏らしたションベン全部舐めたら次は食堂だぞ！ほざっとすんな！」
「ふぁい…♥」

「おうアンジュ。今日も花瓶役、ご苦労さん」
「はいっ！ありがとうございます！
アンジュのバカ丸出しの姿をどうぞ皆様の
笑いものにしてください！」
「バルカンの朝飯が済んだらお前の餌も
やるからな」
「はい！ありがとう
ございますっ！」

ある日、アルゼナルに本土から
アンジュリーゼの使用人を名乗る女が
やって来た。

どうしてもアンジュに会いたいと言うので
女囚達は彼女を食堂裏のゴミ捨て場に案内した。

「こんな汚いところにアンジュリーゼ様が
いらっしゃるのですか？」
「ああ、この辺りにいるはずだ」

ガサゴソ！

「ひっ！なんですの？ネズミ？」
「おいアンジュ！客だぞ！」

「アウ？」
「ひっ！嘘…これが…
アンジュリーゼ様？」
「モモ…カ？どうしたの？
こんなところで…私忙しいんだけど…
バルカン様の食べ残しだけじゃお腹が
減るから…特別に食堂のゴミを
漁っても良いって言われてるの
…貴方も食べたいの？」
「ひぃ～！嘘…嘘よおおおお～っ！」
そうして逃げ出したメイドは二度と
戻ってこなかった。

アルゼナルでは年に一度、
戦士達への慰労行事である
マーメイド・フェスタが
開催される。

アルゼナルの管理運営を
取り仕切るローゼンブルム
家の慰問団の中には、
アンジュのかつての知己、
ミスティ・ローゼンブルムの
姿もあった。

「アンジュリーゼ様に
会えないとはどういうことです
ジル司令官！
私はローゼンブルム王国の
正統な皇女なのですよ！」

「アンジュは今このアルゼナルで
新たな立場を得て新しい
生活をスタートしています。
彼女自身がそれを望んで
いるのです。
今もこのフェスタの重要な
役割を任され、貴方との
面会よりそちらを優先
している」

「そんな！納得いきません！」

「では、一度現在のアンジュの
姿をご覧になるとよろしい
でしょう。今は確か、競豚場で
レースに参加しているはずです」

～[マーメイドフェスタ・競豚場]～

「さぁーっ！盛り上がって
まいりましたピッグダービー！
最終コーナーをトップで曲がって
きたのは～！」

「皆のアイドル！雌豚アンジュちゃんだぁ～！」
「うごっ！ふごっ！ぷぎゅうっ！」
「子豚二匹と大人豚一匹を引きずって
ゆっくりとゴールに近づいていくぞ！
これはライバルを母乳とマンコで
足止めして一位を狙う、アンジュの
必勝パターンだぞ～！」
「いけぇ～！」「頑張れアンジュ～！
あたしの賭けた金を無駄にするなよ～！」
あんじゅ
2
3

「なんですかこれは！今すぐやめさせなさい！」
「これはアンジュ自身が望んだことなのですよ姫。
その証拠に、彼女は今多くの人間から賞賛の
声を浴びている」

「ブゴッブゥ！」
「おやぁ～どうしたことだぁ？突然豚たちがアンジュから離れだしたぞ？」
「ぷぎぃぃーっ！ぷぎぃーっ！」
「ひょっとしてこれはぁ～？出産かぁ～？皆ラッキーだぞ！出産には賭け参加者全員にアルゼナルから祝儀が出る！」
「うおおっ！やったー！」
「産めぇ！アンジュ！ほらヒッヒッフー！」
あんじゅ
1

「出産？一体何を言っていますの？
ここには女囚しかいないはずでしょう？」
「アンジュはアルゼナルの家畜の自給率の
低下を改善するために、自ら望んで
排卵誘発剤を飲んで豚と交尾したのですよ。
全く聖女の如き気高さだ」
「で・・・ではあのお腹はまさか・・・」

「ふぎいいいいいいいいいいいいっ！」
「うおーっ！顔が見えてきたぞーっ！」
「もう少しだ！それヒッヒッフー！ヒッヒッフー！」
「やめて！もうやめなさい！」んな扱い、
あのアンジュリーゼ様を、酷すぎるわ！」
「まあ落ち着いて周囲の人間を良く見てください」
あんじゅ
1

「う…ふぐう〜！」
「泣くなアンジューっ！」
「頑張れーあと少しだ！」
「私達が付いてるぞー！」
「ふぐおおおおおっ！」
ブリュリュリリュリリュッ！
あんじゅ
1

「お…ほお…ほう…おう…」
「生まれた！」「よくやったぞアンジュ！」
「出産おめでとう！」
「これでご祝儀たんまりだぜ！」
あんじゅ
1

「プギィー♥」
あんじゅ
1

「公衆の面前で家畜扱いを受け、あろうことか
豚の子供まで出産させられたと言うのに…
なんて嬉しそうな顔…
私にはアンジュリーゼ様の愛の深さが図りきれて
いなかったのかもしれませんわ…」

「(ククク…これでミスルギ皇国から要請されている
『アンジュリーゼを再起不能にしろ』という命令に
従いつつ、アンジュの命を守ることが出来る…
そしてリベルタスに向け、私の言うことに従順に従い
決して逆らわない一体の人形として、ヴィルキスの
パイロットを手に入れられたというわけだ…
全ては私の計画通りだ)」

その後、アルゼナル襲撃や第二次リベルタスにおいて
肉人形・アンジュがどのような活躍をしたかは、
また別の話である。

～FIN～